道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

三平ちゃんこと風間晋之介さん（左）と地球を40周ほど走った鉄人・賀曽利隆さん（右）。

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

冒険家の風間深志さんが呼びかけ、あっという間に7回目となった「SSTR（サンライズ・サンセット・ツーリング・ラリー）」。大平洋の何処かをスタートし、道の駅を辿りながらその日のうちに石川県の千里浜なぎさドライブウェイを目指します。最短で300キロ、遠くは千キロ超えの人もいますが、もちろんレースではありません。昔のパリダカとラフェスを合わせたようなワクワク感の中、車種や人数に関係なくそれぞれの旅が生まれるところが人気を呼び、初回の百人はすぐに千人を超え、今年はなんと4,040人ものライダーが参加しました（あっという間に定員に達し、キャンセル待ち！）。

当然、千里浜界隈だけでは宿が足りず、ゴール後に金沢や高岡へ向かう人も。今年は初めての試みで、輪島市マリンタウンと七尾市の和倉温泉がゴール会場となり、3カ所でのイベントが行われました。私はたまたま和倉会場のゲストだったのですが、なんとここは全国街路事業促進協議会主催のコンクール視察で2016年に独りでこっそり訪れたところ。温泉街をくまなく歩き、応募の街路をチェックしたり市民の声を聞いたりと、実に思い出深い場所です。「歓迎SSTR」のかわいい旗がその街路灯に掲げられている様や会場に向かう歩道のアプローチには、特別の感動がありました。

和倉会場で主催者の風間深志さんと。右はダカールを夢見る事務所の田中愛生ちゃん。娘みたい♪

和倉温泉街での夕日を堪能した翌日は、やっぱり千里浜へ。最後の催しが行われたのですが、和倉から会場へ向かう時に素晴らしい光景に出会いました。おそらく羽咋市界隈に泊まっていた大勢のライダー達が、輪島・珠洲や和倉方面に向かって対向車線を走ってゆくのです。みんな大きく手を振ってくれます。Yaeh（ヤエー）ラッシュ。懐かしい顔に再会して語らえる1カ所集合も楽しいけれど、せっかく遠くまで来たのだから能登半島一周は絶対にして欲しいし、自分の旅を作っていって欲しい。そう思っていたので、みんなの姿は輝いて映りました。数年前に無料となった「のと里山海道」も気持ちいいけれど、海岸線を走る下道や横断する山道も楽しい能登半島。かつてサイクリングイベント「ツール・ド・のと400」で堪能したあの里山の田舎道が忘れられない私でしたが、今回は地元ライダーの案内で、まさにそんな道を20名でツーリングして和倉へ向かうことができました。

千里浜でこんなシーンが見られるなんて、誰もがあんぐり。間違いなく一番の盛り上がりでした！

選手として一緒に走ったのは、2010年のモンゴルラリー。菅原照仁さんの快進撃はまだまだ続きます。

泣きそうなくらい心地よかった。

私的には「みんな自分の旅を作っている」ことと「ミニツーリング」と「ほのぼの和倉温泉（禰宜あり）」がベスト3だったのですが、そこへもう一つメガトン級の出来事が加わりました。千里浜の海岸に公表されていなかったゲストのミスターXが登場。なんとそれは日野カミオンで負けなしのドライバー菅原照仁さんとダカールラリーに2年連続出場&完走し好成績を残している風間晋之介さん（風間さんのご子息）。2台で千里浜の海岸を激走し始めたのです。会場のライダー達の興奮（もちろん私も）ときたら、もう！　菅原さんは今年のダカールラリーで10リッタークラス10連覇を果たしたベテランドライバーですが、先日ラリー引退宣言をした父の菅原義正氏と共にモータースポーツの歴史を築き上げてきた偉大なるラリースト。彼のデビューの頃が私の引退というタイミングですが、アフリカの現場や準備のル・マンガレージでは幾度もお世話になったり出会ったり。久しぶりの再会に嬉々とする私。そして父の夢を追う晋之介さんは元々俳優さん。テレビ朝日開局60周年記念ドラマ、倉本聰「やすらぎの刻（とき）～道」で根来三平役としてレギュラー出演中のため、今年のダカール参戦は諦めたけれど、あと何回かは挑戦したいと燃えていました。役柄のために菜食でかなりスリムになっていましたが、フコントアップしながら激走する様は圧巻でした。私もですが、みんなに「録画して毎回観ているよ。三平ちゃん頑張ってね！」と声を掛けられては、三平ちゃんの顔ではにかんでいました（流石です！）。それにしても砂浜とダカールマシンは似合います。私のパリダカ子（ホンダのXR400）もここに連れてきてあげたくなっちゃった。

砂浜を埋め尽くしたバイクとライダー。ほんの一部でも圧巻。友達いっぱいできたかな。

32度と言う暑さの中でしたが、ライダー達の想いも熱かったSSTR。このままだと一万人超えも近かったりして!?

九州の散歩道
福岡の都心で「オートキャンプ」

フリージャーナリスト　湯浅玲子

初心者でも気軽に始められるオートキャンプ。テントを張るサイト（敷地）まで車を乗り入れることができるので、重い荷物などを持ち運びする必要がなく、雨が降れば車に避難することもできます。

もともとキャンプ（camp）は「野外で生活する」ことを意味していて、狩猟や採集をする民族には一般的な生活スタイルでした。近代産業社会になって定住するようになり、19世紀後半に教育的な意味合いから行われるようになったのが現代流のキャンプです。さらに車が一般に普及すると、1930年代初頭に米国でオートキャンプが誕生します。現在の欧米ではベッドやキッチンなどを備えたキャンピングカーでのオートキャンプが広く普及しています。

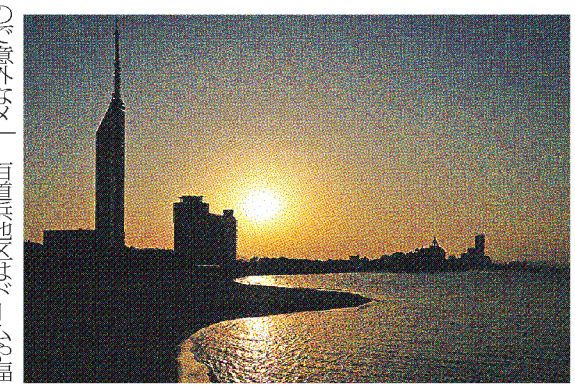
日本では1966年に初めて箱根にオートキャンプ場が誕生し、69年には日本オートキャンプ協会も設立されました。この協会が普及活動に力を入れたこともあり、オートキャンプは90年代に日本でも大きなブームとなりました。

海山の自然に恵まれた九州にはオートキャンプが楽しめる施設がたくさんあります。緑豊かな森の中、山あいの渓流沿い、マリンレジャーが楽しめる海辺。さらに温泉施設のあるオートキャンプ場や、廃校になった学校の敷地を利用した施設もあります。

多くのオートキャンプ場は大自然の中にありますが、今回はちょっとユニークな場所をご紹介したいと思います。人口150万人の政令指定都市・福岡市のど真ん中にオートキャンプ場があるのです。場所はヤフオクドームや福岡タワーのある百道浜地区。福岡市総合図書館や福岡市博物館もあるので、福岡市民なら誰でも一度は訪れたことのある場所です。このヤフオクドーム裏手の人工ビーチに夏季限定でオートキャンプ場がオープンします。

オートキャンプ場のある百道浜は福岡市の中心地

都心に近いので意外なメリットもあります。買い物する場所に困らないので、手ぶらで行っても必要なものがすぐに調達できます。また公共交通機関でも行ける場所なので、キャンプに参加しない人もバーベキューだけ参加して家へ帰ることも可能です。ヤフオクドームで野球観戦をしたあと、ここでキャンプをして仲間同士で楽しむ人もいるようです。


人工のビーチと未来的な建物が映える薄暮の時間

百道浜地区はドームや福岡タワーなどの近未来的な建物が建ち並ぶ独特の景観が人気のひとつ。博多湾に沈む夕陽が周囲を茜色に照らす光景も美しく、夜は見事なイルミネーションも楽しめます。のんびり海を眺めながら、都心の1日を野外で過ごすのも悪くないかもしれません。

（写真提供：福岡市）

ハッと思いました

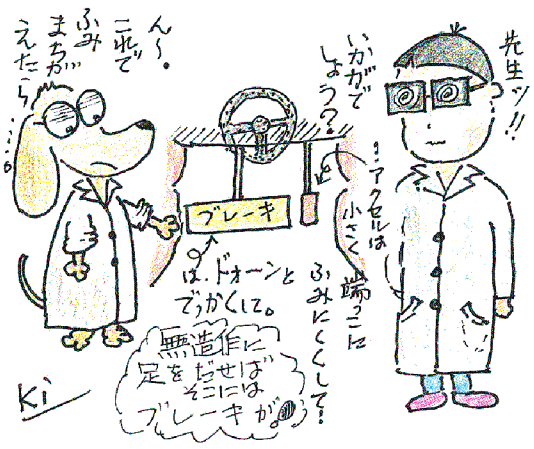
雨の季節、大好きな紫陽花の季節、歳のせいなのか、しっとりとして、ゆっくりと時間が過ぎていくようで、いい季節だなと感じています。

しかしながら、雨が降ると傘をさす事が増えるわけで視界が狭く制限されてしまいます。

近頃は思い寄らぬ所から思いもしないタイミングでクルマが突進してくる交通事故が増えているようですので、歩行者は一層身辺の状況に注意しなければなりません。

それにしても、飲酒運転、あおり運転、逆走運転、轢き逃げ、踏み間違い運転と次から次に世間を騒がす事故が多発しています。もはや、事故とは言えず、悪質な犯罪・事件です。

現在は安全運転のための運転支援システムが数々装備されています。これのおかげで、「危なかった。助かった。びっくりした。」と難を逃れたとします。それは、つまり安全運転をするドライバーとしての資質が欠落していたことの証明だと思うのです。その段階で、ドライバーとして何かしらのチェックなりペナルティがあってもいいのではないかと・・・。ちょっと乱暴の考え方かもしれませんが。

機械に頼ってハンドルを握る事に慣れっこになったり、過信してしまうことの方が怖い事だと思います。

小雨の中、紫陽花を見に出かける方も多いと思います。歩行者もドライバーも気を付けましょう。特にドライバーの方、クルマは凶器になる事を今一度、肝に銘じてくださいね。歩行者の方も、ながらスマホなど身勝手な振る舞いに気を付けてくださいね。怪我や、ましてや命と引き換えにするほどのものは、小さな画面の中にはありはしません。